

「情報リテラシー」と倫理

武沢 護

学校教育は次世代の人材を育てるという観点に立って「倫理」、「環境」そして「教育」をキーワードに、現代の情報社会を読み解くいくつかの視点を紹介し、社会の可能性と問題点を述べていこうと思います。

21 世紀の若者たちに対する教育を情報教育の視点から少し考えていきましょう。まず情報教育の基底に子どもたちが社会の中で情報を収集、分析、判断して、自ら発信するというサイクルがあります。このサイクルで子どもたちに必要とされる力はリテラシー、主体的に活用する態度や技能です。またモラルを意識させることが重要です。これはまさに倫理の問題で、将来、社会にいかに関与するか、どういう態度で参画して行くべきかと関連します。



次に東日本大震災で我々は何を見たかを考えていきます。ICT(Information and Communication Technology：情報通信技術)を利用するに際し大震災ではっきりしたことは2つあります。それは、ICTの光の部分と影の部分です。

光の部分は携帯電話や有線の電話よりもインターネット上での「ツイッター(Twitter)」や「フェイスブック(Facebook)」が非常に有効に働いたことです。携帯電話は制限がかかりつながりにくくなりましたが、インターネットは連絡ツールとして極めて有効でした。ボランティアがツイッターなどを活用し、安否情報を的確に共有しました。

影の部分は、風評被害やチェーンメールの問題です。千葉の製油所火災に関するデマが流れたことは典型的な例です。しかし、それだけでなく「情報の信憑性」という問題を突き付けられました。つまりマスメディアの報道も含め、情報の正誤をどう判断するかという問題です。原子力安全保安院や政府の発表が曖昧だったこともあり、却ってインターネット上で地道に活動している学者たちや研究者個人のサイトの方が、正確な情報を流している場合もあることを知ってしまいました。

ここまですら整理すると、21 世紀が高度情報通信社会であるということ、そしてインターネットの威力がどういうものなのかを認識し、そこには光と影という2つの視点があることです。前者は情報を「活用する」ことです。これはインターネットなどのテクノロジーを積極的に活用していくものです。そして後者は、情報を「批判的に見る」ことです。これはメディアリテラシーという領域です。批判的に情報を精査することが重要です。

ただ、インターネットの基本的なネットワーク技術が分散型技術とデジタル技術の2つ

に表出していることをきちんと理解しておく必要があります。

分散型技術とはネットワーク内のどこかの経路が不通になっても、他で代用できる仕組みです。これがインターネットの威力として今回の大震災で明らかになりました。それからもうひとつはデジタル技術です。デジタル技術の本質は雑音に強いことで、劣化しない高品質のコピーが可能になります。

このようにインターネットは新しいテクノロジーですが、このインターネットを安定した社会基盤にすることは教育の重要な課題です。トヨタの創業者である豊田佐吉は、関東大震災の復興で自動車の活躍を目にし、これからは自動車産業の時代だと悟ったそうです(日経新聞 2011.3.31)。我々も東日本大震災をバネに新しいインフラで、新たなことを考えていくべきだという思いがしてなりません。現在、インターネットは未熟な社会的基盤ですが、これを成熟した基盤にするため安定させていくことが大切です。そのためには、何が基本なのかを正しく認識し、人間の思考や行動がどう変わっていくかを考察することです。それが情報社会における新しい倫理を構築するステップになります。ただ、モラルの形成、倫理の形成は非常に難しいので、私が考えている視点を3つ紹介したいと思います。

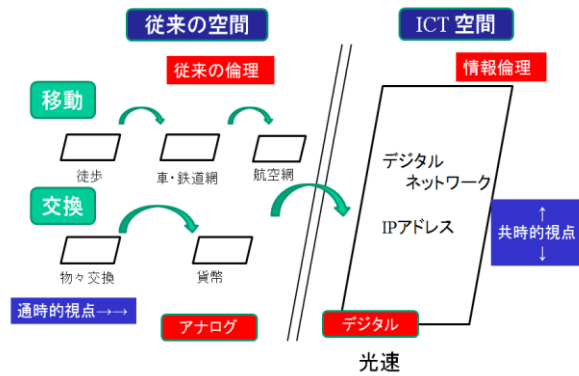
1つ目は、身体性です。技術が進歩すれば肉体に影響があるという意味での身体性です。この身体性に関して人間のよい面も悪い面も含めた変容があります。2つ目は「うち」と「そと」です。我々の行動様式において「うち」と「そと」、もしくは「公」と「私」という概念が変容してきていきます。最後は、「価値観」です。倫理の問題は価値観の問題につながりますので、価値観がどのように変容していくのかという点も重要な視点です。

一般的に情報倫理、情報モラルというと、表面的な事例に「これはいけない、こうするべきだ」という論調になってしまいがちです。そこをもう少し基本的なレベルで考えていきたいと思います。

フランスの建築家ポール・ヴィリリオ(Paul Virilio)が1993年「情報エネルギー化社会」の中で、『空間と時間の遠近法』はコミュニケーション技術の加速効果によって無意味になる。」と述べています。これは技術の進歩の中で、電磁波移送による絶対速度の出現、要するに光速を想定しています。今、まさに我々はインターネットで情報を光速でやりとりするという社会的環境を持つようになりました。もうその中では物理的な出発、移動、到着が解体しているということです。光の速度を持ったコミュニケーションで、時間と空間が様変わりしました。我々が元々持っている生物学的身体性までも変わってきているのではないのでしょうか。

また、イタリアの哲学者ルチアーノ・フロリディ(Luciano Floridi)は、2008年に「情報倫理(Information Ethics)」という論文で、この情報社会を「情報圏」(infosphere)、すなわち ICT 空間として考えるべきだという提案をしています。

まさに我々は ICT という新しい「環境」の中で生活しています。また、フロリディは情報時代の「普遍的な倫理(Universal Ethics)」を模索すべきだとも言っています。万物が情報的な存在物であるという前提の下、普遍的な倫理を構築すべきだということです。「普遍的」に違和感を持つ方がいるかも知れません。そもそも倫理は、民族、宗教、地域等に依存し、価値観の問題でもあるわけですから、かなりローカルなもののはずですが、フロリディは人間のあらゆる行動が ICT 空間の中で行われるという視点から「普遍的な倫理」の構築が



高度情報通信社会の特質

必要だと主張しているのです。

これらを整理する意味で、高度情報通信社会の特質を図に描いてみました。まず人間の移動に関しては、初めは徒歩しかなかった手段が技術の進歩にしたがって我々自身の移動形態(距離感)が変わります。交換も大昔は物々交換でしたが、貨幣の出現で物々交換でなくとも、交換できるようになりました。

これらはアナログの社会の出来事です。デジタル社会ではどうなるでし

ょうか。まず移動は瞬時になされるようになりました。メールはクリックすれば、もう世界中を瞬時に移動してしまいます。交換も、Amazon.comなどで何か買おうとクリックすれば、2、3日後には本が届くということを我々は経験しています。

ICT空間の中での「距離感」は従来とは全く異なるものになるはずですが、そういう距離感の違いは実は以前から存在していたことはご存じでしょう。たとえば、ここ早稲田から熊本に行くのと、長野県の飯田とを比べてみましょう。熊本駅には約4時間ほどで着きますが、飯田駅には5時間ほどかかってしまうのです。実際の距離は飯田の方が遙かに近いのですが、交通手段によって逆転が起きています。自然的な社会に対して技術が「距離」を変えるのです。

さらにインターネットになるとどうなるのでしょうか。通信速度は極めて高速でほとんど距離がありません。距離がないとはインターネット上ではお互いがつながっているかいなか、つまりワイヤード(wired)か、アンワイヤード(unwired)かがだけが問題になるということです。

身体性の問題と関わって、個人が自分の空間をどう捉えるかも劇的に変わって来ています。1970年に出版された『かくれた次元』という本の中で、エドワード・ホール(Edward T. Hall)は「ロサンゼルスでは自動車によって6、7割の公共空間が奪われている」と言っています。自動車は私的な空間の最たるもので、1970年代アメリカでは、通日も駐車場も公園も、車による私的空間で覆われてしまっていると指摘しているのです。

プライバシーに対する感覚の違いもSNS(Social Networking Service)やブログの書き込みに顕著に現れています。つまり、ブログに自分のプライバシーとして重要なことも平気で書いてしまう。SNSやブログを「うち」と勘違いしてしまっていることから生じる危険性といえるでしょう。今、我々にとってインターネット、タブレットPCや携帯電話などによって公共的な空間というべきものが崩れはじめている、あるいは公的でも私的でもない第三の空間が出現し始めているのかもしれない。

これが価値観になるとどうなるのでしょうか。参考になるのはドン・タプスコット(Don Tapscott)の議論です。タプスコットによれば、今、デジタルネイティブというネット型の人類が出現しているということです。デジタルネイティブ世代とは、現在の14歳～34歳ぐらいの人を指します。この世代の人たちが21世紀のほとんど大半を占める世代になって

いきます。こういう人たちがどういう倫理観を持つかは、倫理やモラルよりも明らかに価値観の違いになってきます。世代間ギャップというのは昔から存在していたのですが、ここでは技術の進歩を背景にした溝であることが特徴だと思います。

さて、以上のようなことを考えたとき、我々は若い世代にどのような教育をなすべきでしょうか。やはり情報社会というキーワードの中での倫理を構築すべきですが、そこでは通時的な視点と、共時的視点すなわち同時代的な視点を持つ必要があると考えています。

通時的な視点とは、行動様式や思考様式そして倫理観を世代間を越えてどのように共有するかを考えることです。もちろん「プラスの意味、マイナスの意味を含めて」です。この世代には非常にクリエイティブな人もいるし、新しい感覚で活躍する人もいるので大きな可能性を秘めています。それと併せて、逆にアナログ的な認識を育てることも必要になってくるでしょう。学校教育では足りない部分を補うことも大切なので、そういう視点を持っている必要があります。未来に対してと過去に対して、両面を持つことが大切です。

共時的な視点では「みんなの倫理」です。これまで、たとえば情報倫理では特定の専門家のための「職能倫理」が想定されがちでした。しかし、これからは我々が情報社会の一市民として高い倫理観を持たなければなりません。みんなの倫理とは市民の倫理です。

それからもうひとつ注目したいのは、アメリカの哲学者チャールズ・エス(Charles Ess)の議論です。彼は「グローバル倫理」が今後ますます重要になってくると指摘しています。すなわち民族、宗教、文化を互いに異質であることを前提としつつ、インターネット世界での倫理を構築するということです。ますます進展する国際社会において我々はこのような視点を持ちながら進んで行くことが求められるのです。

教育において次の世代をどう育てていくか、そしてまたインターネットを安定した社会基盤にするために教育の重要性を述べてきました。情報をキーワードにした倫理の涵養、それに基づく教育の営みが今後ますます重要になると感じています。

(教育・総合科学学術院 客員准教授)

【参考文献】

- ・ドン・タプスコット：「デジタルネイティブが世界を変える」、翔泳社、2009.
- ・越智貢、土屋俊、水谷雅彦：「情報倫理学」、ナカニシヤ出版、2000.
- ・西垣通、竹之内禎：「情報倫理の思想」、NTT出版、2007.
- ・ポール・ヴィリリオ：「情報エネルギー化社会」、1993.
- ・エドワード・ホール：「かくれた次元」、みすず書房、1970.
- ・INFORMATION TECHNOLOGY AND MORAL PHILOSOPHY, Cambridge Press, 2008.
- ・日本経済新聞：「東日本大震災今何をすべきか(3)『もの作りの力』今こそ。」、2011.3.31